

□海外文献紹介□

大腸癌リンパ節転移の遺伝子診断

Genetic diagnosis of lymph-node metastasis in colorectal cancer: Hayashi N, Ito I, et al (Lancet 345: 1257-1259, 1995)

大腸癌では、原発巣の完全切除が行われても、局所再発や転移によって約50%の患者は死亡する。腫瘍の再発や患者の予後因子のうち、手術時のリンパ節転移の有無が非常に重要であるが、従来の組織学的検討ではリンパ節転移が認められなかった症例においても5年以内に20~30%が遠隔転移や局所再発で死亡す

る。このような患者での腫瘍再発の原因は不明であった。

著者らは mutant-allele-specific amplification (MASA) という PCR 法を応用した手法を用いることにより、原発巣にみられた遺伝子異常 (K-ras, p53) が組織学的に転移陰性のリンパ節においても認められるものがあること、そしてその感度は数千の正常の細胞中の1つの腫瘍細胞をも検出できることを既に報告しているが、今回、更に大腸癌切除症例のうち組織学的にリンパ節転移を認めない症例における MASA の臨床的意義について検討している。検討

した71例中37例がMASAでリンパ節転移陽性であり、そのうちの27例が手術後5年以内に再発した。再発しなかった10例はすべてDukes分類のAであり、Bに分類されるものはすべて再発した。更にMASAでリンパ節転移陰性であった34例には再発は認められなかった。リンパ節転移の遺伝子診断は大腸癌の予後因子として大変有用であり、術後の補助化学療法の適応の指標になるものであると報告している。

(愛知県がんセンター消化器内科

豊田 英樹 抄)